

ジェンダー研究センター彙報<平成21年度>

(平成21年4月1日～平成22年3月31日)

職名は発令時による

平成21 (2009) 年度研究プロジェクト概要

	年 月 日	テーマ	報告者、評者等
IGS セミナー	ジェンダー研究センター提供科目「国際ジェンダー論」連続講座		
	平成21年5月13日	第1回「ユネスコのジェンダー主流化政策とジェンダー平等のための活動(1)」	【講師】菅野琴(元ユネスコ本部職員/IGS客員研究員)
	平成21年5月20日	第2回「ユネスコのジェンダー主流化政策とジェンダー平等のための活動(2)」	【講師】菅野琴(元ユネスコ本部職員/IGS客員研究員)
	平成21年5月27日	第3回「教育におけるジェンダー平等の評価指標」	【講師】菅野琴(元ユネスコ本部職員/IGS客員研究員)
	平成21年6月3日	第4回「公開シンポジウム：高等教育におけるジェンダー平等と『政治・政策領域』への進出」	【報告】菅野琴(元ユネスコ本部職員/IGS客員研究員)、大木直子(本学大学院博士後期課程)、土野瑞穂(本学大学院博士後期課程)、鈴木規子(金城学院大学非常勤講師) 【コメンテーター】杉田孝夫(本学大学院教授)、申琪榮(IGSセンター員/本学大学院准教授)
共同 研究用 経費 プロ ジェ クト	新自由主義の展開と女性政策の変遷		
	平成21年12月2日	非公開コロキウム 「ドイツの女性政策——EUレベルの政策との比較から」	【講師】イルゼ・レンツ (Ilse Lenz) (ボッフム大学教授)
	平成21年12月16日	第1回公開シンポジウム 「アジアにおけるジェンダー主流化政策」	【講師】キム・ヨンオク (Young-Ock Kim) (韓国女性政策研究院ジェンダー予算センター所長)、リリアン・ワン (Lillian Wang) (国立台湾大学社会工作学系教授) 【コメンテーター】村松安子 (IGS研究協力員/東京女子大学名誉教授)
	平成22年2月6日	第2回公開シンポジウム 「日本におけるジェンダー主流化政策」	【基調講演】福島みずほ(内閣府特命担当大臣) 【報告】大沢真理(東京大学教授)、村松安子(IGS研究協力員/東京女子大学名誉教授)、日下部京子(アジア工科大学院大学准教授) 【コーディネーター】足立真理子(IGSセンター長/本学大学院教授)
講演 会	平成21年6月15日	特別講演 「ジェンダー及び格差是正の点から見たフランスの家族政策」 【主催】本学WORK-FAMプロジェクト「ジェンダー・格差センシティブな働き方と生活の調和」 【共催】IGS、本学グローバルCOEプロジェクト「格差センシティブな人間発達科学の創成」	【講師】ジャンヌ・ファニャニ (Jeanne Fagnani) (CNRS フランス国立科学研究機構研究部長) 【討論者】神尾真知子(日本大学教授)
	平成21年6月19日	国際規格FD事業による講演会 「Introduction to International Relations (国際関係への招待)」 【主催】本学教育開発センター 【共催】IGS、本学グローバルCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」、日本カナダ学会	【講師】クレア・チュレン＝ソーランダー (Claire Turenne-Sjolander) (カナダ・オタワ大学教授) 【コメンテーター】申琪榮(IGSセンター員、本学大学院准教授)、吉沢寿香(本学博士後期課程)、土野瑞穂(本学博士後期課程)

講演会	平成21年 7月 2日	講演会&朗読会 「書く／読む／女性」 【主催】 IGS	【講師】 関口涼子（詩人／翻訳家）
	平成21年 9月26日	「湯浅年子生誕百年記念メモリアル・カンファレンス」 【主催】 湯浅年子生誕百年記念メモリアル・カンファレンス実行委員会 【後援】 IGS、本学理学部、日仏会館（日仏理工科会、日仏工業技術会）、フランス大使館（科学技術部） 【協賛】 お茶の水学術事業会、みすず書房	【講師】 エレーヌ・ランジュバン＝ジョリオ（Hélène Langevin-Joliot）（パリ大学原子核研究所上級研究員） 【リレートーク】 森永晴彦（元東京大学・ミュンヘン工科大学教授）、桑折範彦（徳島大学名誉教授・目白大学教授）、神谷美子（名古屋大学名誉教授）、山崎美和恵（IGS研究協力員／埼玉大学名誉教授）、永野肇（本学教授、日仏理工科会）、佐々木成江（名古屋大学大学院特任准教授）、石野千恵子（伊藤忠テクノソリューションズ研究員）、菅本品夫（本学大学院教授）
シンポジウム 公開	平成21年 7月 4日	「日米における女性の政治参加と政策展開」 【主催】 日米女性政治学者学術交流会 【協賛】 IGS 【協力】 ドイツ日本研究所	【講師】 バーバラ・バルマー（Barbara Palmer）（アメリカン大学教授）、大木直子（本学大学院博士後期課程）、キャサリン・ピアソン（Kathryn Pearson）（ミネソタ大学助教授） 【ディスカッサント】 マーガレット・コンウェイ（Margaret Conway）（フロリダ大学名誉教授）
研究会	平成21年10月31日	読書会 サンドラ・ハーディング『科学と社会的不平等』 【主催】 IGS	【報告】 森永康子（神戸女学院大学教授）、川島慶子（名古屋工業大学准教授）、高橋さきの（IGS研究協力員／東京農工大学非常勤講師）、小川真里子（IGS客員教授／三重大学教授）
	平成21年11月17日	IGS研究交流会 「生殖補助医療とジェンダー 日本・フランス・アメリカ合衆国の比較」	【報告】 小門穂（IGS研究協力員／ハーバード大学客員研究員）、仙波由加里（IGS研究協力員／桜美林大学総合研究機構）
	平成22年 1月20日	映画上映会 「バングラディシユの衣料工場で働く若い女工たち」 【協力】 IGS	【コーディネーター】 長田華子（本学大学院博士後期課程）
学会	平成21年 4月18日	日本フェミニスト経済学会2009年度大会 「金融グローバリズムと貧困の女性の現段階」 【主催】 日本フェミニスト経済学会 【共催】 法政大学大原社会問題研究所 【協賛】 IGS	【座長】 足立真理子（IGSセンター長／本学大学院教授） 【報告者】 竹田茂夫（法政大学）、森岡孝二（関西大学）、藤原千沙（岩手大学） 【コメンテーター】 大沢真理（東京大学教授）、新井美佐子（名古屋大学准教授）

1. 人事関係

1) 運営委員会名簿 (括弧内は在任期間)

ジェンダー研究センター長・人間文化創成科学研究科教授 足立真理子 (平成19年4月1日～)

ジェンダー研究センター員・人間文化創成科学研究科教授 舘 かおる (平成8年5月11日～)

ジェンダー研究センター員・人間文化創成科学研究科准教授 申 琪榮 (平成20年4月1日～)

ジェンダー研究センター員・人間文化創成科学研究科教授 石井クンツ昌子 (平成20年4月1日～)

ジェンダー研究センター員・人間文化創成科学研究科教授 石塚 道子 (平成20年4月1日～)

ジェンダー研究センター員・人間文化創成科学研究科教授 棚橋 訓 (平成20年4月1日～)

人間文化創成科学研究科教授 杉田 孝夫 (平成16年4月1日～平成22年3月31日)

人間文化創成科学研究科教授 真島 秀行 (平成16年4月1日～)

人間文化創成科学研究科教授 宮尾 正樹 (平成19年4月1日～)

人間文化創成科学研究科教授 米田 俊彦 (平成16年4月1日～)

2) スタッフ名簿 (括弧内は在任期間)

センター長 足立真理子 (平成19年4月1日～)

センター教員 舘 かおる (平成12年4月1日～)

申 琪榮 (平成20年4月1日～)

客員教授 (国内) 柘植あづみ (明治学院大学社会学部教授) (平成20年4月1日～平成22年3月31日)

小川真里子 (三重大学人文学部教授) (同上)

伊藤 るり (一橋大学大学院教授) (同上)

客員研究員 市井 礼奈 (南オーストラリア大学・ワークライフバランス研究所研究員) (平成20年4月1日～平成22年3月31日)

小山 直子 (元本学21世紀COEプログラム・ジェンダー研究のフロンティア客員研究員) (同上)

菅野 琴 (元駐ネパールユネスコ代表・カトマンズ事務局) (同上)

戒能 民江 (副学長) (平成21年4月1日～)

磯山久美子 (法政大学非常勤講師) (平成21年4月1日～平成22年3月31日)

ジェームズ・ウェルカー (イリノイ大学アルバナシャンペイン校東アジア言語文化学科博士候補生) (同上)

大海 篤子 (東京都市大学非常勤講師) (同上)

小門 穂 (米国ハーバード大学客員研究員) (同上)

菅野 摂子 (千葉商科大学他非常勤講師) (同上)

小林富久子 (早稲田大学教育学部教授・ジェンダー研究所所長) (同上)

斉藤 正美 (富山大学非常勤講師) (同上)

酒井 順子 (フェリス女学院大学非常勤講師) (同上)

佐藤 (佐久間) りか (元本学COE「ジェンダー研究のフロンティア」研究協力者) (同上)

仙波由加里 (桜美林大学総合研究所) (同上)

高橋さきの (東京農工大学非常勤講師) (同上)

中山まき子 (同志社女子大学教授) (同上)

根村 直美 (日本大学経済学部教授) (同上)

マーラ・パテッショ (英国マンチェスター大学講師) (同上)

村松 安子 (東京女子大学名誉教授) (同上)

学内研究員
研究協力員

	山崎 明子 (元日本学術振興会RPD特別研究員) (同上)
	山崎美和恵 (埼玉大学名誉教授) (同上)
	林 紅 (中国アモイ大学人文学院助教授) (同上)
	山出 裕子 (共立女子大学非常勤講師) (平成21年8月1日～ 平成22年3月31日)
	徐 阿貴 (専修大学他非常勤講師) (平成21年10月1日～ 平成22年3月31日)
研究機関研究員	山出 裕子 (平成20年4月1日～ 平成21年7月31日) 大橋 史恵 (平成21年9月1日～ 平成22年3月31日)
研究支援推進員 事務局員	鍋野 友哉 (平成21年4月1日～) 花岡ナホミ (平成18年4月1日～)

2. 会議関係

<運営委員会の開催>

平成21年5月12日/10月27日/平成22年1月19日

3. 研究調査活動

1) センター共同研究プロジェクト

「教育におけるジェンダー平等：EFA中期評価をジェンダーの視点で探る」

【研究担当】

菅野 琴 (IGS客員研究員/元ユネスコ本部職員・駐ネパール カトマンズ事務所長)

館 かおる (IGSセンター員/本学大学院教授)

【研究内容】

本研究では、ユネスコの中期戦略(2008-13)で提示された、ジェンダー・アクション・プランなどを取り上げ、ユネスコの女性/ジェンダー関連活動の変遷を明らかにし、教育におけるジェンダー平等の戦略と活動や、質的経験の量的評価、指標作成についての研究を行った。その成果は、5月13日、20日、27日に開催された、ジェンダー研究センター提供科目大学院博士前期課程「国際社会ジェンダー論」の講義にも反映されている。6月3日の公開シンポジウムでは、「高等教育におけるジェンダー平等と『政治・政策領域』への進

出」と題し、フランスにおける「政治・政策研究」領域のジェンダー平等政策と日本の比較検討を行った。菅野は引き続き、ユネスコの「ジェンダーと教育アジア・ネットワーク(GENIA)」に専門家として技術協力、ジェンダー・ツール・キット改訂版作成に参加した。

「フェミニスト経済学の理論、方法、課題」

<科学研究費基盤研究B>

【研究担当】

足立真理子 (IGSセンター長/本学大学院教授)

本山 央子 (アジア女性資料センター運営委員)

【研究内容】

本研究の要旨は、90年代初めに国際的に成立した、フェミニスト経済学についての包括的な研究をおこない、経済学の新たな一分野としてのフェミニスト経済学の特質を明らかにするとともに、そこから、従来の経済学においては、しばしば問題の所在そのものが不可視にされ、それゆえに経済問題として扱われてこなかった一連の問題群への接近と現実的対応可能性を見出すことにある。フェミニスト経済学は、フェミニズムの社会的要請を背景として誕生し、ジェンダーに関わる問題群を経済学の学問的領域において検証することを目的とする、経済学の新分野の一つである。フェミニスト経済学の国際的研究活動中心は、1993年に設立された国際フェミニスト経済学会(International Association For Feminist Economics: IAFFE)であり、現在、ジェンダーと経済に関わる最も包括的な研究をおこなうとともに、国連をはじめとする国際機関および各国政府にたいして研究成果の提示を行っている。本研究は、経済学の新分野として成立したフェミニスト経済学を、三つの領域に分けて分析し、フェミニスト経済学の理論的特質と現状分析の課題を明確にしたうえで、市場中心主義な合理的経済人によってのみ構成されるのではない、あらたな経済社会の代替理論の展開を構想する。2009年度は、その3つの領域のうち、マクロ経済のジェンダー分析において、2008年グローバル金融危機を契機として変化した、アメリカ合衆国の個人消費と金融関係に関する実証研究・インタビュー調査を中心に行った。

「アジアにおける再生産領域のグローバル化とジェンダー配置」

【研究担当】

伊藤 るり (IGS客員教授、一橋大学大学院教授)

足立真理子 (IGSセンター長/本学大学院教授)

大橋 史恵 (IGS研究機関研究員)

越智 方美 (本学大学院博士後期課程)

イシカワ・エウニセ・アケミ (静岡文化芸術大学准教授)

稲葉奈々子 (茨城大学准教授)

大石 奈々 (国際基督教大学准教授)

小ヶ谷千穂 (横浜国立大学准教授)

定松 文 (恵泉女学園大学准教授)

このほか、「国際移動とジェンダー (IMAGE)」研究会メンバー

【研究内容】

1980年代後半以降、アジアでは家事、育児、介護、看護等の再生産領域で海外就労する女性労働者の急増が見られる。途上国女性が担う再生産労働はいまや「国際商品」と化し、少子高齢化、女性の就業形態の多様化、サービス経済化に直面する先進工業国で、福祉体制や景気動向を問わず、受容される傾向にある。また途上国でも、海外雇用市場を確保するための方策が戦略的に追求されている。他方、その裏では、海外就労女性の家族に再生産労働の空白が生まれ、そのことが家族や世代間関係に大きな負荷を与えている。再生産領域のグローバル化は、再生産労働の「国際商品」化に留まらず、このような労働と身体への再生産に食い込む《再生産連鎖》の広がりとして認識できる。本研究では、アジアにおける再生産領域のグローバル化の実態とその各国におけるジェンダー (再) 配置との関連を、社会学、経済学、文化人類学、人口研究等の立場から学際的に把握することを目的とした。2009年度は、2005年度から2008年度の科学研究費補助金基盤研究 (A)「アジアにおける再生産領域のグローバル化とジェンダー配置」(研究代表者 伊藤るり)プロジェクトの成果刊行について打ち合わせを行い、執筆予定者が担当部分の報告を行った。

【ウェブ世界におけるジェンダーの位相】

<科学研究費基盤研究B>

【研究担当】

館 かおる (IGSセンター員/本学大学院教授)

小山 直子 (IGS客員研究員)

【研究内容】

本プロジェクトは、情報テクノロジーがもたらす「ジェンダー」にかかわる諸現象の解明を目的とするものであるが、特にウェブ世界におけるジェンダーの位相の様々な形態を研究対象に置く。具体的には「検索画面」を取り上げ、そこで提示される「ジェンダー」関連情報を分析し、検索順位が、人為的操作を介入させない数値的アルゴリズムによって導きだされる「公平」なものという「神話」を、「検索順

位」の決定要因を検証することにより、明らかにする。こうした研究は、情報テクノロジーの進展に伴い、ウェブ世界での「ジェンダー」にかかわる「情報の摂取」や「知の獲得」が、実世界の権力により作為的に作用する事態をテクノロジーの社会的形成の観点から考察することの価値を提示するものである。なお、本研究は、2007-2009年度の科学研究費補助金 (B)「社会科学の新しい研究方法論としての統合型ウェブマイニング環境の開発研究」(研究代表者 増永良文)の一部を分担しており、以下の成果報告を行った。

1. 第15回先進的データベースと応用に関する国際会議 (DASFAA) (2010) で報告、Excellent Demo Awardを受賞。
2. 「社会調査支援の為のSERP Watcherからのランク変動特徴抽出」第2回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2010), A2-5 (2010)。
3. 「新しい社会調査法としての検索エンジン結果ページ群の自動収集・分析装置の開発-SERP Watcherの設計」第1回データ工学 情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2009), D7-5 (2009)。

【医療機器の開発・応用とジェンダー】に関する研究

【研究担当】

柘植あづみ (IGS客員教授/明治学院大学教授)

小門 穂 (IGS研究協力員)

三村 恭子 (本学大学院博士後期課程)

【研究内容】

医学・医療が患者・利用者の身体を客体化していると指摘されて久しい。特に、医学・医療におけるジェンダーバイアスが、医療機器の開発に際しても女性の身体を客体化するように作用するという批判的指摘がある。もちろん、同じ機器・道具であっても、それを使う人の姿勢や熟練、そして患者・利用者の状態 (心身ともに) によって、満足感・不快感、痛みの程度は異なるが、それでも機器・道具の開発デザインの際の視点は重要な要因だと考えられる。そこで、これらの機器がいかに開発・デザインされてきたのか、患者・利用者の声はいかに導入されているのかを調べていきたい。もし、開発の際に「女性向け」を意識したデザインがなされているなら、それはいかに表されているのか、なにをもって「女性向け」とされているのかなどを把握したいと考える。これらの機器と女性との関係の研究は、その一方に「女性の自己決定」として選ばれているとされる医療と女性との関係性について考察する資料をももたらすと考える。2009年度

は、「医療機器の開発・応用とジェンダー」として産婦人科内診台を事例として、それを使用している医療者、患者や利用者である女性、開発しているメーカーや販売会社へのインタビューを実施し、その結果を報告書『内診台調査プロジェクト報告書 医療技術の開発／応用と社会の関係についてのジェンダー分析』にまとめた。なお、フランスにおける生殖補助医療の規制内容とそれらが定められた背景を中心に調査研究した小門の成果には、小門穂「生殖への医学的補助」を受けられるのは誰か—フランスにおける「親になる資格」をめぐる議論から—、『女性空間』(in press)がある。また、11月17日にジェンダー研究センター研究交流セミナーにおいて、「フランスにおける生殖補助医療の現状と課題」というタイトルで報告を行った。

「アジアにおける女性運動の理論的検討」

【研究担当】

戒能 民江 (IGS学内研究員／本学副学長)

申 琪榮 (IGSセンター員／本学大学院准教授)

【研究内容】

2009年度は戦後日本の女性運動の展開を歴史的に再検討した。「女性運動」というカテゴリーを拡大し、フェミニズム運動のみならず女性たちがおもな主体となって行った社会運動として、生活者運動も視野に入れて分析を行った。ジェンダー規範に直接挑戦していない運動であっても女性の集団的な行為を女性運動とみなし、その社会的意味を探った。戦後日本の女性運動は大きく分けて、ジェンダー規範に対して真正面から抵抗する運動と、ジェンダー規範を利用しながらも結果的に違う意味を見出す運動という2つの流れがあると思われる。両者とも、女性たちが日本社会における「近代家族のジェンダー規範」とどう関わっているかという側面から理解する必要がある。本研究の成果は、“The Women’s Movements in Japan,” *Handbook Series of Japanese Politics* (Routledge) として刊行予定である。

「アジアの女性科学者及び科学・医療・技術教育とジェンダー」

【研究担当】

小川真理子 (IGS客員教授／三重大学教授)

舘 かおる (IGSセンター員／本学大学院教授)

【研究内容】

アジアにおける女性科学者研究の推進のために、日本の科学とジェンダーに関わる研究者に呼びかけ、サンドラ・ハーディングの『科学と社会的不平等：フェミニズム、ポストコ

ロニアリズムからの科学批判Science And Social Inequality: Feminist And Postcolonial Issues』の講読を行い、「科学の客観性」につき、議論を深めた。また、科学史とジェンダー研究と女性研究者研究の観点から、日本最初の国際的な物理学者である、湯浅年子博士生誕百年を記念して、9月21日にお茶の水女子大学で開催された「メモリアル・カンファレンス」の企画・実施・成果刊行に携わった。マリー・キュリーの孫にあたる、エレヌ・ランジュバン・ジョリオ博士（フランス・オルセー原子核研究所上級研究員）の講演「キュリー一家の流れを汲む日本の女性研究者 湯浅年子」を『ジェンダー研究』に掲載し、これまでの湯浅年子博士の資料的研究の概要を「解題」としてまとめた。また、「湯浅年子記念奨学基金特別研究員」である、佐々木成江名古屋大学大学院特任准教授、石野千恵子伊藤忠テクノソリューションズ研究員らに同会で報告を依頼し、女性自然研究者育成に関わる多様な形態を考察する機会とした。

「日本における新自由主義の展開と女性政策の変遷」

【研究担当】

足立真理子 (IGSセンター長／本学大学院教授)

舘 かおる (IGSセンター員／本学大学院教授)

申 琪榮 (IGSセンター員／本学大学院准教授)

棚橋 訓 (IGSセンター員／本学大学院教授)

石塚 道子 (IGSセンター員／本学大学院教授)

【研究内容】

2009年度中にイベントを計3回開催した（第1回コロキウム「ドイツの女性政策——EUレベルの政策との比較から——」、第1回シンポジウム「アジアにおけるジェンダー主流化政策」、第2回シンポジウム「日本におけるジェンダー主流化政策」）。第1回公開シンポジウムについては報告者キム・ヨンオク氏およびコメンテーター村松安子氏より『ジェンダー研究』第13号に寄稿いただいた。本プロジェクトの全体的な成果は本年度末に『新自由主義の展開と女性政策の変遷』報告書として刊行した。

2) 個人研究プロジェクト

「家族法とジェンダー化される市民権」

【研究担当】

申 琪榮 (IGSセンター員／本学大学院准教授)

【内 容】

本研究は日本の家族法と国籍法をめぐる最近の判決や議論を通じて日本の（女性）市民権はいかに国家の法律によって、

「家族」と結びつけられ、ジェンダー化されているのかを明らかにするものである。2009年度は、日本の現行民法における「夫婦同氏」制度について考察し、この制度が持つ女性に対する市民権の側面を分析した。フェミニズム理論に基づいて、近代国民国家が戸籍による家族制度を基盤として形成される際、女性を家族の構成員として（政治社会共同体の構成員ではなく）扱うということがもともと露骨に現れる点に注目した。研究成果は、論文“The Personal is the Political”として*Journal of Korean Law* (2009) に掲載された。

「ジェンダー視点に立った予算分析の実践——業績評価からのアプローチ——」

<科学研究費補助金若手B研究>

【研究担当】

市井 礼奈 (IGS客員研究員／南オーストラリア大学ワークライフバランス研究所研究員)

【研究内容】

本研究はジェンダー視点に立った業績指標作成をめざし、諸外国における事例を検討した上で、日本政府のワークライフバランス政策の中の両立支援予算に着目し、ジェンダー視点に立った予算分析ならびに業績評価指標を開発するものである。2009年度はアジア太平洋地域におけるジェンダー視点に立った予算運営について研究を行った。まず、アジア太平洋地域におけるジェンダー視点に立った予算運営の実施状況を調査した。その上でSharp (2002) が提唱したジェンダー予算の3つの目標（ジェンダーに対する認識を高めること、予算運営の透明性や説明責任を高めること、ジェンダー平等を促進するために予算の優先順位や予算配分を変更すること）を分析枠組として、各国の取組を分類した。その結果、多くの国々で第1、2目標は達成したものの、第3目標を達成した国は無かった。次に、ジェンダー視点に立った予算運営を教育政策に応用するための枠組、例えば教育政策における評価指標の活用を検討した。

「戦後日本における『美術』と『家庭科』の教科編成——『手芸』再定位のポリティクス——」

【研究担当】

山崎 明子 (IGS研究協力員／元日本学術振興会RPD特別研究員)

【研究内容】

本研究は、日本近現代における女性の表現活動を規定する社会システムを明らかにしようとする一連の研究の中に位置

づけられるものであり、前年度に引き続き、学校教育における表現活動の位置づけをジェンダー理論の視点から再検討することを目的としている。2009年度は、これまで続けてきた女子美術教育の歴史を総括することを目指した。女子の美術教育をめぐる問題は、「美術」という制度が持つ社会的問題を大きく反映している。「美術」そのものに内包されるジェンダーシステムは、社会の中で機能する際、女性的なるものを周縁化するとともに、女性そのものをも排除・周縁化する可能性を持つ。このことを、制度として確立させたものが近代の美術教育制度であり、また女子教育制度内における造形教育であり、美術批評でもあった。本研究は、これらの「美術」制度をめぐる複数のシステムから近代の女子美術教育の位置を明らかにした。

「工学教育とジェンダー」

【研究担当】

高橋さきの (IGS研究協力員／東京農工大学・本学非常勤講師)

【内容】

2009年度は、産業構造のシフトと性差観の関係を総合的に扱うための題材、特に、重工業的な労働形態が成立した戦前期から戦後の時期に形成された性差観について可視化できるような題材について検討した。また、現在基盤の固まりつつあるウェブ社会におけるジェンダー秩序について内部観測的に検討できるような題材についても検討を行った。こうした題材の利用により、学生が各自の専攻内容と密接に関わる存在としてジェンダーの社会関係を把握することが可能となり、また、ジェンダーの社会関係が介在することで、科学技術を取りまく社会関係の存在を臨場感をもって理解することが可能になるとの確信を深めた。研究成果の一部は、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校で開かれたワークショップUCLA Workshop on Dis/continuities、2009年度科学技術社会論学会第8回年次研究大会のワークショップ、生物学史分科会11月度月例会にて報告した。

「スペインにおける少子化対策と女性の移民」

【研究担当】

磯山久美子 (IGS研究協力員／法政大学他非常勤講師)

【研究内容】

本研究は、スペインにおける少子化対策に、モロッコやエクアドルなどからやってきた移民の女性がどのように影響を与えているかを考察したものである。研究成果の一部は、川成洋、坂東省次編『スペイン文化事典』、丸善出版事業部、

2010年11月発行（予定）に、「スペインの女性」として執筆し、変容するスペイン社会における移民の女性が占める社会的な位置づけについて述べた。

「女性と選挙」

【研究担当】

大海 篤子（IGS研究協力員／武蔵大学非常勤講師）

【研究内容】

日本では女性と政治のかかわりについての研究はまだ少なく、本研究プロジェクトでは、これまでの女性の選挙に関する資料をまとめている。また、選挙の執行後、できるだけ早く、情報と分析を英文にて公開できるようにした。2009年度は、7月1日～5日まで、日米女性政治学研究者交流シンポジウム（JAWS）を開催。アメリカから6人を招き、ワークショップ2回、国際シンポ2回（うち1回はお茶大ジェンダー研究センター共催）、運営と発表を行った。発表タイトルは“Women’s Political Participation in Japan”（「日本の女性の政治進出」）。富山県魚津市で開催した市民団体と共催のシンポは地域の女性たちと研究者の交流ができ、アメリカ側の参加者が日本の地方都市の女性の力を感じる機会となった。

「英国在住の日本人女性たちのライフストーリー」

【研究担当】

酒井 順子（IGS研究協力員／フェリス女学院大学他非常勤講師）

【研究内容】

2009年度は、オーラル・ヒストリーと女性史に関して以下の出版を行った。

- ・「口述文化と文字世界——シティ・オブ・ロンドンに見られた労働文化の伝達」松塚俊三・八鍬友広編著『識字と読書』昭和堂、2010年。
- ・（翻訳）君塚直隆監訳『ブリテン諸島の歴史——19世紀』第4章「ジェンダー、家庭重視、性の政治学」慶応義塾大学出版会、2009年。

どちらも、イギリス史の文脈において行った仕事であるが、イギリスに移民した日本人女性の歴史を描くうえでの背景となると思われる。

「自己/身体とジェンダー」

【研究担当】

斉藤 正美（IGS研究協力員／富山大学非常勤講師）

【研究内容】

2009年度は、これまでの女性・フェミニズム運動と自己/身体性およびジェンダーについての研究の背景にある「ジェンダー」概念の考察に取り組んだ。女性学など学問領域においては視点や分析概念として展開される一方、1990年代以降は、男女共同参画政策においても啓発の際に用いられてきたカタカナ語「ジェンダー」の受容過程について社会言語学的なアプローチにより再検討した。その結果、抽象的概念を表すカタカナ語であるゆえに、意味が定まりにくいこと、意味が定まらないままに派生語や複合語が増える傾向にあること、理解を広げるためのエキスパートを必要とすることなどを指摘した。さらに、男女共同参画政策の現状について、実際に地域ではどのような状況が展開されているのか、一定地域に即して検討し国内外の学会で報告した。

「第三者の介入する生殖補助医療が社会へもたらす影響——精子・卵子・胚の研究利用」

【研究担当】

仙波由加里（IGS研究協力員／桜美林大学総合研究機構）

【研究内容】

2009年度は、多くの研究者や第三者の介入する生殖補助医療（以下DC [Donor Conceptionの略] と書く）にかかわる当事者と交流し、多くの情報を収集することができた。2009年11月にはIGSの研究会において、これまで調べてきた代理懐胎やDCに関する法規制について、とくに米国の事例を中心に、報告の機会を得て、出席者から、貴重なアドバイスや情報を得ることができた。2010年3月16日には、明治学院大学で開催された「医療技術とジェンダーセミナー」で、オランダ・ユトレヒトのUniversiteit voor HumanistiekのDr. Jyotsna A. Guptaの報告にあわせて、2007年に武藤香織氏他4名の研究者と一緒に米国、英国、韓国、台湾、フランスに関して実施した代理懐胎の実施状況やDCの法規制の現状について英語で報告する機会を得た。このセミナーでは代理懐胎の問題について、Dr. Guptaをはじめ、参加者と活発な意見交換をすることができた。

2009年11月には論文「Surrogacy: Donor Conception Regulation in Japan」(1467-8519 Online) が『bioethics』(Blackwell Publishing Ltd.)に掲載された。

「韓国ジェンダー予算（性認知予算）の研究」

【研究担当】

村松 安子（IGS研究協力員／東京女子大学名誉教授）

【研究内容】

2009年度は、11月末に成立した2010年度予算をもって本格的に開始された、韓国性認知予算過程のフォローアップを実施した。文献調査と平行して、2010年2月22日から26日までソウル市で大学研究者、政府研究機関研究員、NGO関係者から聞き取り調査を行った。調査の重点は、過去2年間に追跡してきた性認知予算の構想・実施準備・予定指標などが、どの程度現実に移されたのか、理想(準備段階での理論や構想)と現実にギャップはあるのか、ギャップがあるとすれば何処に現れたか、なぜ乖離は生じたか、などであった。

まだ分析途上であるが、以下の3つのカテゴリーに問題があったと思われる。1) 政権交代による政府のコミットメントの低下、2) 社会一般の関心の低さ（行政職員、議員、NGO活動家、一般市民を含むすべて）、3) 男女平等の目標・成果指標をどう定式化するかを中心とする技術的問題である。1)には予算に責任を持つ企画財務部と男女平等政策・施策に責任を持つ女性部の「力」関係も含まれるが、実施の具体的手続が法で整備されていなかったことも大きい。3)に関しては、男女平等を「成果（outcome）」で見ようとするとき、どのような状態を「平等」が達成された状態と看做すかという大問題である。研究の成果は、2010年2月IGS主催公開シンポジウムでの報告「ジェンダー予算——マクロ経済をジェンダー主流化する——」、および『ジェンダー研究』第13号寄稿論文「東アジアにおけるジェンダー予算導入の現状」として発表された。

「リプロダクションと日本の政策」

【研究担当】

中山まき子（IGS研究協力員／同志社女子大学教授）

【研究内容】

2009年度は、日本の出産・助産に焦点をあて、その変容・悪化過程と「政策」との関わりを解説・考究した。その結果、日本の出産関連「政策」の軌跡を追跡（①明治以来2010年までの諸法律、②とくに1997年の産科閉鎖問題の発生から2010年現在の詳細な政策・行政省令・提言等）すると、そこには「ユーザー」（女性たち）が選択できるはずの、4種類の選択肢（自宅出産、私営助産院出産、公営助産院出産、病院／診療所出産）を、意図的・自覚的に、疲弊・瓦解・崩壊・自壊させてきた経緯がみられた。政策目標として、「安

全な分娩管理」が掲げられ、女性の身体に対する「国家管理・医療的管理・医師主導的管理」を徹底して進めることが目指され、徹底した管理を行うためには、女性や子どもを、そして医師を大型施設に集約することが重要／必要であり、助産所、診療所の閉所はいたしかたないという考えが、政策推進上にあった可能性がある。あるいは2年先・5年先の、出産環境や女性の心身の安寧についてあまり思慮していなかったのではないかと推測された。以上、政策立案に際し、結果や未来予測のシミュレーション力が欠落している・あるいは不足していること、さらに根本的には「人・女性」などユーザー視点が見られないことなどの問題点を提示した。その上で、「人間の安全保障」という理念が、出産・助産政策にも必要不可欠であることを提案した。

「明治初期における女性の公共領域への進出」

【研究担当】

マラー・パテッシオ（IGS研究協力員／英国マンチェスター大学講師）

【研究内容】

本年度の研究成果は、以下のように出版される予定である。単著：*Women and public life in early Meiji Japan. The development of the feminist movement* (Michigan University Pressより2011年刊行予定)。

共著：P. Kornicki, M. Patessio, G. Rowley. *THE FEMALE AS SUBJECT. READING AND WRITING IN EARLY MODERN JAPAN* (Michigan University Pressより2010年刊行予定。うち以下の論文を執筆担当した。FROM READERS TO WRITERS: WOMEN and MAGAZINES DURING THE 1890S.)。

「女（性）の変貌——昭和後期のトランスナショナルに関わった女たち——」<米国フルブライト研究助成>

【研究担当】

ジェームス・ウェルカー（IGS研究協力員／イリノイ大学アーバナシャンペーン東アジア言語文化学科博士候補生）

【研究内容】

博士論文のテーマは70～80年代を中心に①日本のウーマン・リブ運動および②レズビアン・コミュニティ、③少女マンガ（特にいわゆる少年愛マンガ、『ジュネ』や『アラン』などを含む耽美系雑誌）に関するものである。2009年度は、国会図書館、私的アーカイブ等にて雑誌や新聞の記事、一般の書物、漫画の単業本など、ミニコミ等の資料を集め、70～

80年代のウーマン・リブ運動、およびレズビアン・コミュニティの活動に関わった人物、さらに当時のいわゆる少年愛マンガの愛読者達を対象にインタビューを行なった。5月には、上智大学で行われた「Revisiting Postwar Japan as History」研究会にて発表を行った。

「中国レズビアン・ゲイのクラブ活動について——アモイ大学の事例を中心に」

【研究担当】

林 紅 (IGS研究協力員/中国アモイ大学人文学院助教授)

【内容】

中国における大学でのLGBTレズビアン・ゲイのクラブ活動について調査したところ、北京では、すでにレズビアン・ゲイグループが存在しているが、アモイ大学では、2009年以降にレズビアン・ゲイのクラブ活動が開始された。北京より保守的な傾向のアモイでは、大学の干渉を最低限にするため学生の活動は校外で行われ、映画上映のような文化活動や女性への性暴力防止やジェンダー研究コースの主張などが中心となっている。アモイ大学での主な行動は、性自認と性的指向への暴力の防止、LGBTの映画を毎週上映することである。特にアモイでは、LGBTの活動を広げ、社会運動の概念を持ち込んだコミュニティを立ち上げ、より多くの学校にLGBTの資料をもたらすことが重要であることが明らかになった。

「北・南米の日系女性文化に見られるジェンダーと表象性の比較研究」<科学研究費補助金若手 (B) 研究>

【研究担当】

山出 裕子 (IGS研究機関研究員)

【研究内容】

本研究は、北米 (カナダ、アメリカ) と南米 (特にブラジル) の日系女性文化に見られる特徴を、ジェンダーと表象性に注目して比較分析するものである。2009年度は、北米 (カナダやハワイ)、南米 (ブラジル) における日系女性文化、文学に関する比較的研究を行った。それぞれ、カナダのトロント、モントリオール大学、ブラジルのサンパウロ大学、ハワイのハワイ大学での資料収集、研究調査、現地の研究者との交流などを行った。その成果として、2009年度に日本国内外の学会にて発表を行い、研究調査報告や研究論文が、2009～10年度にかけての、国内や海外の学術雑誌で発表されている。

「韓国と日本における識字運動と移民女性」

【研究担当】

徐 阿貴 (IGS研究協力員/専修大学他非常勤講師)

【研究内容】

本研究は、韓国と日本での移住女性政策および運動について、識字に焦点をあてて比較考察するものである。本年度は、ソウル近郊の「文解」教育機関および日本の夜間中学増設運動に関し、インタビューおよび資料収集を行った。これまでの調査から、次のような問題点が見えつつある。①移住女性の識字問題は、日本では市民運動が長年取り組み、公立夜間中学や地方自治体による日本語教育に反映されているが、受益者の多くが女性である点が見過ごされ「外国人の人権問題」として括られがちである。②韓国では政策と運動において、結婚移住女性の識字教育は重要課題とされているが、韓国社会への統合を最終的な目標としており、移住女性の人権問題としてあまり捉えられていない。日韓ともに移住女性を主体とする視点が希薄であり、これを追及していることを今後の課題としたい。

4. 研究交流・社会連携部門

平成21年4月1日より平成22年3月31日の間の活動は次の通りである。

1) 研究委員会

平成21年11月17日

「生殖補助医療とジェンダー 日本・フランス・アメリカ合衆国の比較」

小門穂 (IGS研究協力員) が「フランスにおける生殖補助医療の現状と課題」、仙波由加里 (IGS研究協力員) が「アメリカにおける生殖補助医療」と題した報告を行った。

2) IGSセミナー、講演会、ワークショップ

①平成21年5月13日、5月20日、5月27日

ジェンダー社会科学専攻「国際ジェンダー論」連続講座 (全3回)、ジェンダー研究センター提供科目、女性リーダー育成プログラム (実践編) 履修科目、講師：菅野琴 (元ユネスコ本部職員、元駐ネパールユネスコ代表・カトマンズ事務所長、IGS客員研究員)

②6月3日〈公開シンポジウム〉『高等教育におけるジェンダー平等と「政治・政策領域」への進出』

ジェンダー研究センター提供科目、ジェンダー社会科学専攻「国際ジェンダー論」、女性リーダー育成プログラム (実践編) 履修科目。

報告者：菅野琴（元ユネスコ本部職員／IGS客員研究員）が「教育におけるジェンダー平等評価——ユネスコ等国際機関からの問題提起」、大木直子・土野瑞穂（本学大学院博士後期課程）が「日本における「女性議員」のキャリア形成——政治・政策研究との関連から」、鈴木規子（金城学院大学非常勤講師）が「フランスにおける『政治・政策研究』領域のジェンダー平等政策」と題した報告を行った。

③ 6月15日〈講演会〉『ジェンダー及び格差是正の点から見たフランスの家族政策』

講演者：ジャンヌ・ファニャニ（CNRSフランス国立科学研究機構研究部長）。

④ 7月2日〈講演会〉『書く／読む／女性』

講師：関口涼子（詩人、翻訳家）による朗読「二つの市場、ふたたび」および講演「書く女性。読む女性。」

⑤ 7月4日〈公開シンポジウム〉『日米における女性の政治参加と政策展開』

バーバラ・パルマー（アメリカン大学教授）が“Women as Third Party Candidates in the USA”、大木直子（本学大学院博士後期課程）が“Women in the Local Election in Japan: The Electoral System and Political Recruitments”、キャサリン・ピアソン（ミネソタ大学政治学部助教授）が“Speaking for the Underrepresented: The Gender Dynamics of Floor Speeches in the House of Representatives”と題した報告を行った。

⑥ 9月26日〈講演会〉『湯浅年子生誕百年記念メモリアル・カンファレンス』

エレヌ・ランジュバン＝ジョリオ（パリ大学原子核研究所上級研究員）が「キュリー家の流れを汲む日本の女性研究者 湯浅年子」と題して記念講演を行った。また、リレートーク・展示等関連イベントを行った。

⑦ 共同研究用経費プロジェクト『新自由主義の展開と女性政策の変遷』

12月2日〈非公開コロキウム〉「ドイツの女性政策——EUレベルの政策との比較から」

講師：イルゼ・レンツ（ボッフム大学教授）

12月16日〈第1回公開シンポジウム〉「アジアにおけるジェンダー主流化政策」。講師：リアン・ワン（国立台湾大学社会工作学系教授）、キム・ヨンオク（韓国女性政策研究院ジェンダー予算センター所長）。

2月6日〈第2回公開シンポジウム〉「日本におけるジェンダー主流化政策」。福島みずほ（内閣府特命担当大臣）が「日本におけるジェンダー主流化政策と今後の政策展

望」と題する基調講演を行った。大沢真理（東京大学教授）が「ジェンダー主流化が日本を再生させる」、村松安子（IGS研究協力員／東京女子大学名誉教授）が「ジェンダー予算——マクロ経済をジェンダー主流化する」、日下部京子（アジア工科大学院大学准教授）が「アジアからみた日本のジェンダー主流化政策」と題し報告を行った。

3) 関連研究会

① 「映像表現とジェンダー」研究会

＜コーディネーター＞館かおる（IGSセンター員／本学大学院教授）、小林富久子（IGS研究協力員／早稲田大学教授）

＜事務局＞磯山久美子（IGS研究協力員／立教大学他非常勤講師）、臺丸谷美幸（本学大学院博士後期課程）

② 「資本・移動・セクシュアリティとジェンダー研究会」

＜コーディネーター＞足立真理子（IGSセンター長／本学大学院教授）、田崎英明（立教大学教授）、伊田久美子（大阪府立大学教授）

③ 「自己／身体とジェンダー研究会」

＜コーディネーター＞根村直美（IGS研究協力員／日本大学教授）、館かおる（IGSセンター員／本学大学院教授）

＜メンバー＞齊藤正美（IGS研究協力員／富山大学非常勤講師）、佐久間りか（IGS研究協力員／元本学COE研究協力者）、菅野摂子（IGS研究協力員／千葉商科大学・東京家政大学ほか非常勤講師）、朝倉京子（東北大学大学院教授）、田中俊之（学習院大学・首都大学東京ほか非常勤講師）、兵藤智佳（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員講師）、東優子（大阪府立大学准教授）

4) 関連プロジェクト

① 文部科学省委託事業：近未来の課題解決を目指した実証的社会科学研究推進事業「ジェンダー・格差センシティブな働き方と生活の調和：キャリア形成と家庭・地域・社会活動が可能な働き方の設計」（平成20年度～平成24年度）

＜研究分担者＞永瀬伸子（本学大学院教授）、石井クンツ昌子（IGSセンター員／本学大学院教授）、戒能民江（本学副学長／IGS学内研究員）、申琪榮（IGSセンター員／本学大学院准教授）、菅原ますみ（本学大学院教授）、館かおる（IGSセンター員／本学大学院教授）

6. 教育・研修部門

①研究員

落合 恵美 (日本学術振興会特別研究員)
土野 瑞穂 (日本学術振興会特別研究員)
長田 華子 (日本学術振興会特別研究員)
中村 雪子 (日本学術振興会特別研究員)

②学部出講・大学院担当

<人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学
専攻>

足立真理子

開発経済学 (前期)
ジェンダー基礎論 (前期 3 コース教員担当)
開発経済学演習 (後期)
開発ジェンダー論特論 (前期 オムニバス)
国際社会ジェンダー論演習 (後期 複数教員担当)

館 かおる

ジェンダー関係論 (前期)
ジェンダー関係論演習 (後期)
開発ジェンダー論特論 (前期 オムニバス)
国際社会ジェンダー論 (前期 館かおる・菅野琴)
国際社会ジェンダー論演習 (後期 複数教員担当)

申 琪榮

フェミニズム理論の争点 (前期)
比較ジェンダー開発論 (前期)
フェミニズム理論の争点・演習 (後期)
比較ジェンダー開発論・演習 (後期)
開発ジェンダー論特論 (前期 オムニバス)
ジェンダー立法過程論 (後期 複数教員担当)
国際社会ジェンダー論演習 (後期 複数教員担当)

<人間文化創成科学研究科博士後期課程ジェンダー社会科学
専攻>

足立真理子

フェミニスト経済学演習 (通年)
ジェンダー学際研究論文指導 (通年)

館 かおる

ジェンダー史論演習 (通年)
ジェンダー学際研究論文指導 (通年)

申 琪榮

家族政策論 (前期)

<学部>

足立真理子

ジェンダー論 (後期)
グローバル文化学総論Ⅱ (後期 オムニバス)

館かおる

リベラルアーツ・ジェンダー7 テクノサイエンスのジェ
ンダーポリティクス (後期)

7. 社会貢献

ジェンダー研究センター

・諸外国/国内の女性関係行政部門、民間団体 (NGOの女
性問題担当者等)、研究者等の視察受け入れ、日本の男女
共同参画等の現状について解説など

足立真理子

<他大学出講>

・早稲田大学法学部非常勤講師「歴史・思想研究入門」「ジェ
ンダー論Ⅰ」(平成21年4月1日~平成22年3月31日)
・法政大学大学院経済学科非常勤講師 (平成21年4月1日~
平成22年3月31日)

<その他>

・日本フェミニスト経済学会代表など

館 かおる

<委員>

・日本学術会議連携会員
・湯河原町男女共同参画懇話会会長

<その他>

・2009年お茶の水女子大学・葛飾区男女平等推進センター連
携かつしか講座「葛飾」におけるワーク・ライフ・バラ
ンス」講師

・足立区をもっと知り、もっと参画するための講座「女性問
題から男女共同参画へ」(足立区男女共同参画プラザ主催)
講師

・平成21年度男女共同参画施策推進者養成研修講座「男女共
同参画社会の実現に向けて」(神奈川県立かながわ女性セ
ンター主催) 講師

8. 文献・資料収集/情報提供/閲覧活動

1) 主要収集資料

湯浅年子博士の資料整理、湯浅年子生誕百年記念事業への協力
【担当】 館かおる (IGSセンター員/本学大学院教授)、山崎美和恵 (IGS研究協力員/埼玉大学名誉教授)、小山直子 (IGS客員研究員)、佐藤梢 (IGSアカデミック・アシスタント)、大橋史恵 (IGS 研究機関研究員)

2) 資料提供

- 高エネルギー加速器研究機構 「FJPPLWorkshopにおける湯浅年子先生のセレモニーおよびToshiko Yuasa Laboratory冊子」へ、湯浅年子関係の資料提供
- 毎日新聞 「湯浅年子博士誕生100周年記念記事」へ、湯浅年子関係の資料提供
- 株式会社アドバトロス 「社報“共栄”」へ、黒立チカ関係の資料提供。
- 株式会社映像館 「科学技術振興機構が運営するサイエンスチャンネル」へ、保井コノ関係の資料提供。
- 新潮社 「季刊 考える人」に、湯浅年子関係の資料提供
- 東かがわ市文化財保護審議会 「東讃今昔写真帖」に、保井コノ関係の資料提供。
- 独立行政法人国立女性教育会館 「企画展示 女性科学者の誕生〜チャレンジした女性たち〜」に、保井コノ、辻村みちよ、黒田チカ関係の資料提供。
- 三重県男女共同参画センター 「女性研究者の源流を訪ね、今とこれからの考えよう！ワークショップ」に、湯浅年子、黒田チカ、保井コノ関係の資料提供。
- 東北大学大学院理学研究科広報室 「ランジュバン・ジョリオ博士講演会」に、湯浅年子関係の資料提供。
- 東京大学大学院理学系研究科 「日本物理学会誌」に、湯浅年子関係の資料提供。
- 本学理学部 「湯浅年子生誕100周年記念メモリアル・カンファレンス」に、湯浅年子関係資料提供。
- 株式会社トランスビュー 「マリー・キュリーの挑戦—科学・」ジェンダー・戦争」に、湯浅年子関係資料提供。
- 東かがわ市立三本松小学校 「香川県教育会 さぬき・人・ここにあり (さぬき人物再発見事業)」に、保井コノ関係の資料提供。
- 講談社 「日本の歴史22政党政治と天皇」に、保井コノ関係資料提供。
- 東京女子高等師範学校関係の資料
- その他、ジェンダー研究センター刊行物等

3) リファレンスサービス資料及び情報の提供・閲覧・貸出・常設展示

- コピーサービス: 常時附属図書館情報サービス・情報システム係で担当
- ホームページ (和文・英文) の更新実施
- 図書以外に関する情報提供

4) 図書・資料寄贈 (敬称略)

掲載は、和書：寄贈者名『書名』(著者名)、洋書：寄贈者名書名(イタリック)(著者名)の順とした。

<和書>：山出裕子『ケバックの女性文学：ジェンダー・エクリチュール・エスニシティ』(山出裕子著)、清原 滋子『せせらぎから大河へ：埼玉県の看護 戦前・戦中・戦後 激動の昭和を生きて』(埼玉の看護を考える会編)、『埼玉県看護協会十年の歴史：看護研修センター建設に情熱を傾けて』(協会記念誌作成委員会編)、ジェンダー研究センター『研究所報』(法政大学日本統計研究所編)、『ポジティブ・アクションの可能性：男女共同参画社会の制度デザインのために』(田村哲樹、金井篤子編)、『女性と統計：ジェンダー統計論序説』(法政大学日本統計研究所、伊藤陽一編著)、『タイの花鳥風月』(レスカー・ムシカシントーン著)、『シルクロード・路上の900日：西安・ローマ1万2000キロを歩く』(大村一朗著)、『今日、仕事でため息をついたあなたへ』(BPW札幌クラブ編)、『ICT・メディアとジェンダー問題・ジェンダー統計』(法政大学日本統計研究所 [編])、『働き方の多様化とセーフティネット：能力開発とワークライフバランスに着目して』(労働政策研究・研修機構研究調整部研究調整課編集)、『モダンガールズあらわる：昭和初期の美人画展』(川西由里編集)、『ワークライフバランスと雇用システム』(厚生労働省編)、F-GENS事務局『女の怪異学』(鈴木紀子、林久美子、野村幸一郎編著)、篠塚英子『女性リーダーのキャリア形成』(篠塚英子編著)、原ひろ子『持続可能な消費と生活者』(原ひろ子、小澤紀美子編著)、『次世代育成を考える』(原ひろ子編著)、『ドメスティック・バイオレンス：日本・韓国比較研究』(庄司洋子、波田あい子、原ひろ子編著)、『ジェンダー問題と学術研究』(原ひろ子 [ほか]編)、『戦後女性労働基本文献集』(藤原千賀、武見李子編集解説・解題)、戒能民江『DV防止とこれからの被害当事者支援』(戒能民江編著)、『成人女性の学習：ジェンダーの視点からの問い直し』(エリザベス・ヘイズ、ダニエル・D. フラネリー編著；入江直子、三輪建二監訳)、F-GENS 事務局『月経と犯罪：女性犯罪論の真偽を問う』(田中ひかる著)、

『貧困と社会的排除：福祉社会を蝕むもの』（岩田正美、西澤晃彦編著）、『働く過剰：大人のための若者読本』玄田有史著、『多元化する「能力」と日本社会：ハイパー・メリトクラシー化のなかで』本田由紀著、『世界の女性：その実態と統計』（国際連合原著；日本統計協会訳 1970-1990）、『世界の女性：その実態と統計』（国際連合原著；日本統計協会訳 1995）、『ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク』（ステイヴン・モートン著；本橋哲也訳）、『特集危機言語』（「ことばと社会」編集委員会編）、『結婚の比較文化』（小椋山ルイ、北條文緒編）、『東南アジアの美術』（フィリップ・ローソン著；レスカー・M、永井文、白川厚子訳）、『マレーシア凜凜』（伴美喜子著）、『モダン・マスキュリニティーズ』（細谷実編集 2003年）、『ECE地域におけるジェンダー統計ウェブサイトの構築：関係報告書の翻訳と論評』（法政大学日本統計研究所 [訳編]）、『女性と男性の統計論：変革の道具としてのジェンダー統計』（ビルギッタ・ヘッドマン、フランチェスカ・ペルーチ、パール・スンドストローム著；伊藤陽一 [ほか] 訳）、『戦（いくさ）の中の女たち』（西村汎子編）、『軍国の女たち』（早川紀代編）、『植民地と戦争責任』（早川紀代編）、『揺らぐ性・変わる医療：ケアとセクシュアリティを読み直す』（根村直美編著）、『ポストコロニアル理性批判：消え去りゆく現在の歴史のために』（G. C. スピヴァク著；上村忠男、本橋哲也訳）、『「ジェンダーと開発」に関する日本語文献データベース』（お茶の水女子大学「グローバル化とジェンダー規範」に関する研究会編）、『論座』（朝日新聞社 [編]）、『思想』（岩波書店）、『季刊家計経済研究』（家計経済研究所 [編]）、『モナ・リザは妊娠中?：出産の美術誌』（中川素子著）、『親子関係のゆくえ』（有賀美和子、篠目清美編）、『緑色の野帖：東南アジアの歴史を歩く』（桜井由躬雄著）、『タイ仏教入門』（石井米雄著）、『カンボジアの民話世界』（高橋宏明編訳）、『カンボジア・僕の戦場日記』（後藤勝著）、『風土が作る文化：屋敷囲いとしての石垣』（漆原和子編）、『近代の恋愛観「抄」』（厨川白村 [著]）、『恋愛の諸問題「抄」』（土田杏村 [著]）、『恋愛の史的考察』（石原純 [著]）、『プロレタリア恋愛観：如何に新しく恋愛すべきか?』（今野賢三 [著]）、『新恋愛論』（杉山平助 [著]）、『犯罪と人生/変態性欲と犯罪』（高田義一郎 [著]）、『近世性欲学精義』（田中香涯 [著]）、『恋愛と人間愛「抄」』（米田庄太郎 [著]）、『性教育は早く実施せよ』（マーガレット・サンガー著；鳥山朝夢訳）、『優生学より見るセクシュアリティ：アンソロジー』、『性と恋愛の研究』（佐藤寿編）、『竿頭の蛇：怪貞操』（北村兼子 [著]）、『ハルピン夜話：支那街の一夜』

（奥野他見男 [著]）、『芸者繁昌記；花柳行状記』（平山蘆江 [著]）、『全国花街めぐりり』（松川二郎 [著]）、『アンソロジー「美人論」の変遷』（井上章一編）、酒井光『夫紺青の海』（坂井光夫）、島利栄子『手紙が語る戦争』（女性の日記から学ぶ会編）、遠座公一郎『なんてんに星を追って。』（福井康雄著）、日本たばこ産業株式会社『日本たばこ産業：百年のあゆみ』（三和良一、鈴木俊夫著；日本経営史研究所、たばこ総合研究センター（TASC）編纂）、(株)朱鳥社『ドレスを着た電信士マ・カイリー』（松田裕之著）、東京大学出版会『法の性別：近代法公私二元論を超えて』（フランシス・オルセン著；寺尾美子編訳）、鳥根県立大学・宇野重昭・小林博『北東アジア地域協力の可能性』（宇野重昭、小林博編）、鳥根県立石見美術館『美しさへの挑戦：ヘアモード・メイクアップの300年：日本の美・化粧と髪型』（ポーラ文化研究所、NHKプロモーション編集）、『スポーツウェアの革命：もうひとつの20世紀ファッション = Women and sports wear』（南目美輝構成・編集）、『森英恵手で創る：東京・パリー島根』（森英恵 [作品]；森英恵ファッション文化財団編集）、東京女子大学女性学研究所『女性とライフキャリア』（矢沢澄子、岡村清子、東京女子大学女性学研究所編）、渡辺めぐみ『農業労働とジェンダー：生きがいの戦略』（渡辺めぐみ著）、陸小媛『現代中国の人口移動とジェンダー：農村出稼ぎ女性に関する実証研究』（陸小媛著）、昭和女子大学『女性と仕事』（昭和女子大学女性文化研究所編）、申琪榮「女たちの21世紀：特集「女性センター」はどこへ行く?」（アジア女性資料センター）

竹村和子 *Reflexive modernization : politics, tradition and aesthetics in the modern social order* (Ulrich Beck, Anthony Giddens and Scott Lash)、*The Continuum complete international encyclopedia of sexuality* ([edited by Robert T. Francoeur and Raymond J. Noonan]、F-GENS事務局 *Feminist (re)visions of the subject : landscapes, ethnoscapas, and theoryscapes* (edited by Gail Currie and Celia Rothenberg)、*Gender injustice : an international comparative analysis of equality in employment* (Anne-Marie Mooney Cotter)、*The domestic revolution : enlightenment feminisms and the novel* (Eve Tavor Bannet)、*The subject of violence : arendtean exercises in understanding* (Bat-Ami Bar On)、*The gender dimension of social change : the contribution of dynamic research to the study of women's life courses* (edited by Elisabetta Ruspini and Angela Dale)、*Introduction to longitudinal*

research (Elisabetta Ruspini)、*Gender and development : the Japanese experience in comparative perspective* (edited by Mayumi Murayama)、*Anecdotal theory* (Jane Gallop)、*The care of the self* (Michel Foucault ; translated from the French by Robert Hurley)、*A companion to feminist geography* (edited by Lise Nelson & Joni Seager)、*A critique of postcolonial reason : toward a history of the vanishing present* (Gayatri Chakravorty Spivak)、*Dilemmas of desire : teenage girls talk about sexuality* (Deborah L. Tolman)、*Écrits : a selection* (Jacques Lacan ; translated by Alan Sheridan)、*Gender and politics in early modern Europe : English convents in France and the low countries* (Claire Walker)、*Mary Wollstonecraft and the feminist imagination* (Barbara Taylor)、*The portable Kristeva* (Kelly Oliver, editor)、*The nick of time : politics, evolution, and the untimely* (Elizabeth Grosz)、*Realistic socio-legal theory : pragmatism and a social theory of law* (Brian Z. Tamanaha)、*Encyclopedia of feminist literature* (Kathy J. Whitson)、*Looking at lives : American longitudinal studies of the twentieth century* (Erin Phelps, Frank F. Furstenberg Jr., Anne Colby, editors)、*A guide to gender-analysis frameworks* (Candida March, Ines Smyth, and Maitrayee Mukhopadhyay)、*The sphere of the intimate* (Jeffrey Weeks)、『歴史・国家・女性：韓・日比較女性史のための試み』 = 역사・국가・여성 : 한·일 비교 여성사를 위한 시도 : 극/제/심/포/지/움、Ilse Lenz *Die neue Frauenbewegung in Deutschland : Abschied vom kleinen Unterschied : eine Quellensammlung* (Ilse Lenz)、*Die Neue Frauenbewegung in Deutschland : Abschied vom kleinen Unterschied ; ausgewählte Quellen* (Ilse Lenz)、ジェンダー研究センター *Being together, working apart : dual-career families and the work-life balance* (edited by Barbara Schneider and Linda J. Waite)、*Work-life integration : international perspectives on the balancing of multiple roles* (edited by Paul Blyton [et al.]、*The myth of work-life balance : The challenge of our time for men, women and societies* (Richenda Gambles, Suzan Lewis and Rhona Rapoport)、*Work-life balance : a psychological perspective* (edited by Fiona Jones, Ronald J. Burke and Mina Westman)、*Harvard business review on work and life balance*

5) 来館・閲覧者

学生・研究生・大学院生 4名

大学院以上の研究者 7名

その他 2名